シニアボランティア活動の活性化とネットワーク

平成4年3月
シニアボランティア研究会

は　じ　め　に

老人は豊富な知識と経験を活用して，社会的活動に参加し，生きがいの持てる健全で安らかな生活を保障されるものという老人福祉法の基本的理念の具体化として，定年前後，つまり「シニア」といわれる年齢層の生き方について，とりわけ関心がもたれるようになってきている。

この度，「社会福祉・医療事業団」助成事業として，「シニアボランティア活動の活性化とネットワーク」という研究助成により，このテーマをとりあげたのも，上記のような背景をうけてのことである。

研究の方法としては，全国各地で「シニアボランティア」として，生き生き自由人として，活力のある活動にとりくんでおられる個人やグループを選定し，訪問面接による「ききとり調査」をおこない，親の代からの当事者の生育暦，活動にとりくんだ動機，感想など，かなり綿密なききとりをした。

それらのデータにもとづき，現在のボランティア活動に至った経過，社会参加をしている個人，グループの動機，参加の意識，満足感，問題，課題等の分析を行なった。

くわしくは，本文にまとめたが，この度の研究調査により，現在「シニアボランティア」といわれる年齢層の方々は，大正，昭和の戦争，終戦，家族の生活苦，社会復興等の体験をもち，経済的，社会的，生命の不安等激動の時代を生きぬいてこられた方々であり，共通の時代背景を背負ったユニークで複雑な人生体験の積みあげからにじみ出た人柄を見出すことができた点，また，それらの人生体験を土台とした社会参加，ボランティア活動のとりくみ方，余暇の活用の仕方，グループづくりの人間関係のつくり方，生き方など，当初の仮説以上のヒントを見出すことができた点，真に感慨深いものがあった。

とりまとめの中間報告として，示唆に富んだ活動をしておられる方々数名の事例発表を含めて「シニアボランティアを考えるつどい」を開催した。

最後に，短い研究期間ではあったが，8回余にわたる研究委員合の開催と，各地の訪問調査等に積極的な意欲をもってとりくんでくださった研究委員各位の努力により，ここに報告書をまとめることができたことや，面接調査にご協力いただいた方々に心から感謝申しあげる。

また，今回，このような研究の機会をつくってくださった「社会福祉・医療事業団」に厚くお礼を申しあげ，今後，増加するであろう「シニア」階層の方々の地域参加，社会参加の活性化に何がしかのお役に供することができればと念願し，報告とする次第である。

平成4年3月

シニアボランティア研究会代表　石黒ティ子

Ⅰ　研究の目的

ボランティア活動が全体として低迷している我が国にあって，子育てに一段落した主婦層と定年退職後の高齢者層は，ボランティア活動への参加が積極的な世代として位置付けることができよう。2つの世代に共通することは，子育てなど家族生活を維持していくために生活に追われるという感覚から，多少なりともこれまでの生き方を振り返る余裕ができた世代であることである。

もちろん，若い世代にあっても子どもの保育園や小学校を通して，余裕のない生活を打開するかのように，ネットワークを張りながら生き生きとした人生を享受している人々が存在することも事実である。しかし，そのような人々は少数派であり，大半は生活に追われ，社会との繋がりも最少限度というのが一般的であろう。

ここでは，とりわけ高齢者層のボランティア活動に焦点を当てる。彼らを，ここではシニアボランティアと呼んでおく。それでは，なぜシニアボランティアなのか。

日本社会では，定年退職を迎えた高齢者層は，いわゆる「会社人間」からの切り替えが課題となる。会社の肩書が消え，役割喪失に伴う定年神経症（V．E．フランクル）に陥る人さえいる。つまり，人生の充実期をより充実させるための様々な模索が行なわれる。ボランティア活動は，生き方の充実（たとえそれが自己満足であろうと）という点で，また社会関係の広がりという点で，その充実を可能にする一つの方法である。

加えてここで主張しておきたいことは，ボランティア活動のイメージの変更ということである。すなわち，「社会奉仕」というイメージから，「豊かな社会関係の創出」といったイメージを強調することである。このことは，人間が社会関係の中で誕生し，生活し，死んでいくという単純な事実を肯定することでもある。さちにこのことは，「受動的な高齢者像」から「主体的な高齢者像」を具体化することにも寄与する。

ところで，今回の研究テーマは，「シニアボランティア活動の活性化とネットワーク」であるが，「活性化」及び「ネットワーク」という言葉の使用について若干の説明を加えておきたい。

まず，「活性化」という言葉であるが，それはどのような意味で「活性化」なのか。ここでは，第1に，シニアボランティアの量が拡大すること。言い換えると，シニアボランティアの裾野を広げることである。第2は，シニアボランティアの質の転換である。具体的には，上述したように，まずシニアボランティアのイメージを，「社会奉仕」というイメージから「豊かな社会関係の創出」といったイメージを強調すること，つぎにシニアのイメージを，「受動的な高齢者像」から「主体的な高齢者像」へ変えていくことである。第3に，シニアボランティア活動の活性化は，換言すると，社会福祉協議会（以下「社協」と呼ぶ）の活動の活性化という意味をも含むということである。

これら異なる次元に属する3つの事柄の総称として，ここでは「活性化」という言葉を使用している。

つぎに「ネットワーク」という言葉であるが，これはどのような意味で使用されているか。第1に，これは社協活動の視点を強調していることである。第2は，シニアボランティア活動が「豊かな社会関係の創出」というイメージを強調することとも相俟って，これらと密接に関連をもつ生涯教育の各種施策とのネットワークという意味である。ここでも「ネットワーク」という言葉は，多重な意味で使用されている。

以上のような観点から，本研究では，シニアボランティア活動の実像を調査し，その問題点や今後の課題を明らかにすることを目的とする。

II研究の方法

昨年10月28日から今年3月1日まで計7回の研究会がもたれた。課題は，研究の進め方，事例の選定，聞き取り調査項目の検討，調査の纏め方，報告会のもち方，報告書のまとめ方などであった。また3月28日には，全国社会福祉協議会ホールにおいて，調査の中間報告・事例報告・総括からなる「シニアボランティアを考えるつどい」を開催した。この「つどい」は，研究の中間報告会という意味の他に，シニアボランティアに関心をもつ人々の「ネットワーク」という視点や，さらにそれの「啓蒙」という視点が含まれていた。

本研究では，シニアボランティア活動の対象を，個人と団体に分けた。この場合，団体に属さずに個人でボランティア活動をする場合，団体に属してそれをする場合がある。前者については個人用の調査票を，後者については団体用と個人用の調査票を，それぞれ使用した。

調査票および調査対象リストは，「シニアボランティア研究会」で作成した。とりわけ調査対象Ijストの作成にあたっては，同種の活動に偏らないように様々なシニアボランティア活動を網羅的に選定した（資料を参照）。しかも，調査対象の選定にあたっては，一定の地域に偏らないように配慮した。

調査員は，「シニアボランティア研究会」のメンバーである。調査期間は，1991年12月下旬から1992年2月中旬の約2カ月間である。

調査は，個人の自宅で行なわれたり，活動の拠点で行なわれたりで，基本的には調査対象者の都合に合わせた。調査時間は，個人票のみあるいは団体票のみの場合で，30分から60分の間，個人票及び団体票の場合が60分から90分の間であった。

調査対象は，個人で70ケース，団体で23ケースである。

個人用の調査票では，氏名，年齢，性別，ボランティアグループ名，住所，家族構成，仕事の有無，社会参加の有無などのフェースシート部分と，ボランティア体験，ボランティア観，ボランティア活動に至るまでの生活史，今後のことなどから構成される（資料を参照）。

団体用の調査票では，会員数，性別，年齢，仕事の有無，開始時期，活動年数，活動を始めた動機，活動の種類・内容，活動の場所，対象者，活動で心掛けていること，活動して楽しかったこと，活動継続の秘訣，活動で苦労したこと・困ったこと，定例会の有無，開催の割合，開催場所，会報の有無，研修会の有無，研修会の主催，保険の有無，掛け金の負担，年会費，予算，助成金の有無，新入会員の受け入れ状況，リーダーの選び方，他団体との交流の有無などから構成されている（資料を参照）。

III　調査結果の概要

1. シニアボランティアとは

シニアボランティア（senior volunteers）のプログラムは多様であるが，代表的なものは以下の3つに分類される。

1つは，ボランティア活動の受け手としてのシニアである。ここでは，公的な機関によって訓練を受け，スーパーバイズされ，しかも組織化された援助者が，ニードを持つ個人に対応する。2つ目は，シニアがシニアに対して行なうボランティア活動である。ここでは，シニアは，援助の受け手であると同時に，援助の提供者でもある。より健康なシニアがそうでないシニアに対して行なうボランティア活動である。3つ目は，世代間で行なわれるボランティア活動である。ここでは，援助の受け手とそれの提

供者が，シニアと若年層といった風に世代間で行なわれるボランティア活動である。

3つのプログラムは，シニアをほぼ60歳以上と定義している。1）

以上の概念を参考にしながら，本研究では，シニアボランティア活動を次のように定義した。すなわち，「援助の受け手であると同時に援助の提供者でもある，おおむね55歳以上の高齢者が同世代および異世代に対して行なう援助行動である」と。つまり，ボランティア活動の受け手としての機能しか果たさないシニアおよびシニア・グループについては，シニアボランティア活動の定義から除外した。

例えば，大阪市のA社会館が行なっている給食ボランティア活動は，シニアがシニアに対して行なうボランティア活動である。彼らの多くは，援助の受け手ではなく，援助の提供者であることに生きがいを感じている。また，自分たちが近い将来援助の受け手になることを一方で自覚しつつ，他方で今援助の提供者であることに満足している。

同じく大阪市のB老人会が行なっている友愛訪問活動も，シニアがシニアに対して行なうボランティア活動である。とりわけ，友愛訪問活動は，援助の提供者とそれの受け手が固定化するため，月に一度，援助の受け手を援助の提供者が集会所に連れて来て食事をする「なかよし会」の活動は，援助の受け手の社会関係を広げるという機能と，老人会にとって友愛訪問活動の社会化という2つの機能を果たしている。ひとり暮らし老人の場合，病気→入院→葬式といった一連の行為を通して，「明日は我が身」といった感情と相互援助意識が強化されるのであろう。

また，静岡県菊川町のCさんが行なっている障害者の移送や話相手をするボランティア活動，大阪市のDさんが行なっている自助具を製作するボランティア活動などは，社会的弱者である同世代および異世代の障害者に対する援助行動である。

これに対して，日本シルバーボランティアズの会員であるEさん，Fさんの活動は，発展途上国の農業指導であったり，教育活動であったりするが，基本的には自分たちと異世代の人々に対する援助行動である。

このように見てくると，「シニア→シニア」型，「シニア→シニアおよび若年層」型，「シニア→若年層」型のボランティア活動が見られる。このことは，シニアボランティア活動にいくつかの類型が存在することを予想させる。

2. 個人調査の概要

・調査対象者は，女性54．3%，男性45．7%である。

・対象者の年齢構成は，全体では「65歳～69歳」が31．4%で最も多く，以下「60歳～64歳」の21．4%，「55歳～59歳」の15．7%，「70歳～74歳」の11．4%などが続いている。性別で見ると，男性は「60歳～64歳」および「65歳～69歳」がそれぞれ31．25%で最も多く，以下「70歳～74歳」の15．6%などが続いている。一方，女性は「65歳～69歳」が31．6%で最も多く，以下「55歳～59歳」の26．3%，「60歳～64歳」の13．2%などが続いている。

・対象者の家族規模は，2人が40．0%で最も多く，以下3人の20．0%，4人の17．1%と続いている。

・対象者の家族構成は，夫婦2人が40．0%で最も多く，以下2世代同居の27．1%，3世代同居の11．4%などが続いている。

・就労の有無では，「無し」が71．4%を占めている。性別では，男性が「無し」62．5%，女性が「無し」78．9%となっている。

・社会参加の経験の有無では，「有り」が81．4%を占めている。性別では，男性が「有り」81．25%，女性が「有り」81．6%となっている。

・ボランティア活動の開始時期では，「平成元年～平成2年」25．7%で最も多く，以下「昭和61年～昭和63年」および「昭和50年以前」がそれぞれ20．0%，「昭和56年～昭和60年」の17．1%，「昭和51年～昭和55年」の8．6%，「平成3年以降」の5．7%などとなっている。

・ボランティア活動の開始年齢では，「49歳以下」が37．1%で最も多く，以下「60歳～64歳」の27．1%，「65歳～69歳」の15．7%，「50歳～54歳」の10．0%などが続いている。これを性別に見ると，男性では「60歳～64歳」が34．4%で最も多く，以下「49歳以下」および「65歳～69歳」がそれぞれ21．9%で続いている。女性では「49歳以下」が50．0%で最も多く，以下「60歳～64歳」の21．1%，「50歳～54歳」の13．2%などが続いている。

・活動を始めた動機では，「人から勧められて」が

22．8%で最も多く，以下「社会のために何か役立ちたかったから」の15．7%，「ボランティア講座に参加して」の12．9%，「身近にボランティア活動を見聞きして」「自分の技術，能力，経験を生かしたかったから」がそれぞれ10．0%，「仲間が誘い合って」の8．6%，「余った時間を有意義に使いたかったから」の7．1%，「定年後の生きがいとして」「身近でその必要性が生じたから」がそれぞれ5．9%，「社会福祉協議会の呼びかけがあって」の4．3%，「健康のため」「福祉に関心があったから」がそれぞれ2．9%などとなっている。これらの動機を性別で見ると，男性では「人に勧められて」が37．5%で最も多い。一方，女性では「社会のために何か役に立ちたかったから」が23．7%で最も多い。さらに動機内容のうち，「人から勧められて」「仲間が誘い合って」「社会福祉協議会の呼びかけがあって」などを『勧められて』，「ボランティア講座に参加して」「身近にボランティア活動を見聞きして」「自分の技術・能力・経験を生かしたかったから」「余った時間を有意義に使いたかったから」「定年後の生きがいとして」「健康のため」などを『自発的に』，「社会のために何か役に立ちたかったから」「身近でその必要性が生じたから」「お世話になったお返しのため」「福祉に関心があったから」などの『自発的にプラス社会関係』として類型化すると，『自発的に』が48．8%，『自発的にプラス社会関係』が46．1%，『勧められて』が35．7%となっている。これを性別で見ると，男性では『勧められて』50．0%，『自発的に』40．6%，『自発的にプラス社会関係』34．4%となっている。一方，女性では『自発的に』および『自発的にプラス社会関係』がそれぞれ55．3%，『勧められて』が23．7%となっている。

・家族の反応では，「賛成している」が74．3%を占めている。これを性別で見ると，男性では「賛成している」が75．0%，女性では「賛成している」が73．7%となっている。

・ボランティア活動の種類・内容では，「施設内での奉仕」が17．1%で最も多く，以下「食事サービス」の15．7%，「施設の清掃」の11．4%，「地区の清掃」「手作り玩具，道具の作成」がそれぞれ10．0%，「友愛訪問」「入浴サービス」「おもちゃ図書館」「専門技術指導」がそれぞれ8．6%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「施設内での奉仕」「専門技術指導」「手作り玩具・道具の作成」がそれぞれ12．5%で最も多い。一方，女性では「食事サービス」が28．9%で最も多い。

・研修や講座などの受講の有無では，「受講経験有り」が69．2%を占めている。

．活動で心掛けていることでは，「無理をしない」が21．4%で最も多く，以下「相手の身になってやさしく思いやりをもって接する」の20．0%，「人間関係を大事にする」の14．3%，「自分自身のためにする」の11．4%，「責任をもってやる」「プライバシーを守る」「仲間づくり」「みんなの意向を聞き楽しくやる」の7．1%，「継続してやる」の5．8%，「本人の能力を最大限に尊重し，過剰サービスをしない」男性では「健康に気をつける」がそれぞれ4．3%などとなっている。これを性別で見ると、「相手の身になってやさしく思いやりをもって行なう」および「人間関係を大事にする」がそれぞれ21．9%で最も多い。一方，女性では「無理をしない」が31．6%で最も多い。

・活動して楽しかったことでは，「対象者に喜んでもらえたこと」が34．3%で最も多く，以下「仲間を得ることができた」が27．1%，「喜び，充実感が得られたこと」の21．4%，「仲間と協力できたこと」の12．9%，「社会や人の役に立ったこと」の7．4%，「対象者と心が通じ合えたこと」の5．7%，「人生の生きがいができたこと」「家族や周囲の人の理解が得られた」がそれぞれ4．3%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「仲間を得ることができた」が31．25%で最も多く，以下「対象者に喜んでもらえた」の28．1%で続いている。一方，女性では「対象者に喜んでもらえた」が39．5%で最も多く，以下「喜び・充実感が得られた」の31．6%，「仲間を得ることができた」の23．7%，「仲間と協力できた」の18．4%などが続いている。

・活動で苦労したこと，困ったことでは，「特になし」が37．1%で最も多く，以下「仲間がなかなか得られない」の11．4%，「ボランティア同士の人間関係がうまくいかない」の8．6%，「グループの活動費や運営費が不足している」「体力がついていかない」がそれぞれ5．8%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「特になし」が40．6%で最も多い。一方，女性でも「特になし」が34．2%で最も多い。

・生きがいを感じることでは，「相手に喜んでもらえたこと」が31．4%で最も多く，以下「活動すること自体」の28．6%，「活動のあとの充実感」の14．3%，

「人のために役に立ったこと」の11．4%，「社会の役に立ったこと」「対象者と共に喜べたこと」がそれぞれ7．1%，「健康で若くいられること」「すばらしい人と出会えたこと」がそれぞれ4．3%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「対象者に喜んでもらえた」が25．0%で最も多い。一方，女性でも「対象者に喜んでもらえた」が36．8%で最も多い。

・ボランティアに向いている点では，「人の役に立つのが好き」が11．4%で最も多く，以下「時間的余裕がある」「相手の気持ちがよくわかる」がそれぞれ7．1%，「誰とでも話を合わせられる」の5．7%，「楽天的で明るい性格である」の4．3%などとなっている。

・考え方の変化では，「特にない」が20．0%で最も多く，以下「健康を第一に考えるようになった」「世の中が広く見えるようになった」「障害の重い人と対等に付き合えるようになった」がそれぞれ7．1%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「特にない」が25．0%で最も多い。一方，女性では「特にない」および「健康を第一に考えるようになった」がそれぞれ15．8%で最も多い。

・生活上の変化では，「特にない」が40．0%で最も多く，以下「忙しくて時間がなくなった」「健康になった」「生活に張りが出て来た」がそれぞれ8．6%，「家族や周囲の人にもボランティアの時の気持ちで接することができる」の7．1%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「特になし」が28．1%で最も多い。一方，女性でも「特になし」が50．0%で最も多い。

・世間の人々の見方，あるいは世間の人々からの言われ方としては，「良くやっていますね」が22．9%で最も多く，以下「好きだから」の14．3%，「ボランティアをしていることを知らない」の12．9%，「えらいですね」の11．4%，「他の人の言うことは気にしない」の10．0%，「よいことをしている」の8．6%，「特別なことをしている」「暇があるから」がそれぞれ7．4%，「お金があるから」「御苦労様」がそれぞれ4．3%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「良くやっていますね」および「ボランティアをしていることは知らない」がそれぞれ21．9%で最も多い。一方，女性では「良くやっていますね」が23．7%で最も多く，以下「好きだから」の21．1%，「えらいですね」の15．8%などが続いている。

・ボランティア活動とは何かでは，「生きがい」が18．6%で最も多く，以下「生活の一部として自然に身についているもの」の15．7%，「健康のための活動」「社会への奉仕」がそれぞれ12．9%，「自分のできることはできるうちにやる」「生涯学習であり自らを高めること」「喜びや楽しみ・希望」がそれぞれ10．0%，「人への奉仕」の8．6%，「仲間づくり」の5．7%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「生きがい」が25．0%で最も多い。一方，女性では「生活の一部として自然に身についているもの」が21．1%で最も多く，以下「生きがい」の15．8%，「社会への奉仕」「健康のための活動」「自分のできることはできるうちにやる」がそれぞれ13．2%で続いている。

・出身地では，「同一地方外」が30．0%で最も多く，以下「同一都道府県外」の24．3%，「同一町村内」の18．6%，「同一市区内」の14．3%，「同一都道府県内」の12．9%となっている。これを性別で見ると，男性では「同一町村内」が21．9%で最も多い。一方，女性では「同一都道府県外」が28．9%で最も多い。

・兄弟の数では，「6人以上8人未満」が24．3%で最も多く，以下「5人」の18．6%，「4人」「3人」がそれぞれ17．1%，「1人」「2人」がそれぞれ7．1%，「8人以上」の5．7%となっている。これを性別で見ると，男性では「6人以上8人未満」が31．25%で最も多く，以下「4人」の18．75%，「5人」の15．6%などが続いている。一方，女性では「3人」が23．7%で最も多く，以下「5人」の21．1%，「6人以上8人未満」の18．4%などが続いている。

・兄弟の順位では，「長子」が41．5%で最も多く，以下「中間子」の40．0%，「末っ子」の17．1%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「長子」が43．7%で最も多く，以下「中間子」の40．6%などが続いている。一方，女性では「長子」および「中間子」がそれぞれ39．5%で最も多い。

・父親の職業では，「自営業（農業を含む）」が42．9%で最も多く，以下「会社員」の28．6%，「公務員，教員」の21．4%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「自営業（農業を含む）」が59．4%で最も多い。一方，女性では「会社員」が31．6%で最も多く，以下「公務員・教員」および「自営業（農業を含む）」がそれぞれ28．9%などとなっている。

・母親の職業では，「専業主婦」が67．1%で最も多

く，以下「自営業（農業を含む）」の11．4%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「専業主婦」が68．75%で最も多い。一方，女性でも「専業主婦」が65．8%で最も多い。

・両親の社会的活動の有無では，「両親とも社会的活動なし」が38．6%で最も多く，以下「父のみ社会的活動あり」の27．1%，「両親とも社会的活動あり」「母のみ社会的活動あー）」の5．7%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「両親共に社会的活動なし」が43．75%で最も多い。一方，女性でも「両親共に社会的活動なし」が34．2%で最も多い。しかし「両親および両親のどちらかが社会的活動あり」の比率では，男性28．1%，女性47．4%となっている。

．最終学歴では「旧制中学，旧制女学校卒」が25．7%で最も多く，以下「高等学校卒」の17．1%，「大学卒」の12．9%，「小学校卒」の10．0%，「中学校卒」の5．7%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「高等学校卒」が18．75%で最も多く，以下「大学卒」「旧制中学卒」がそれぞれ15．6%で続いている。一方，女性では「女学校卒」が34．2%で最も多く，以下「高等学校卒」の15．8%などが続いている。

・学校卒業後の職業では，「会社員」が54．3%で最も多く，以下「公務員，教員」の24．3%，「自営業（農業を含む）」の5．7%などとなっている。これを性別で見ると，男性では「会社員」が65．6%で最も多い。一方，女性でも「会社員」が44．7%で最も多い。

・結婚年齢では，男性が「25歳以上28歳未満」「28歳以上」のそれぞれ37．5%で最も多く，以下「23歳以上25歳未満」の12．5%などとなっている。一方、女性は、「23歳以上25歳未満」が34．2%で最も多く、以下「20歳以上23歳未満」「25歳以上28歳未満」がそれぞれ26．3%などとなっている。

・苦労した体験の有無では，「あり」が77．1%を占めている。これを性別で見ると，「あり」の比率は男性で71．9%，女性で81．6%となっている。

・その苦労体験で助け合うことの重要性を感じたかどうかでは，「重要性を感じた」が74．1%を占めている。これを性別で見ると，「重要性を感じた」の比率は男性で69．6%，女性で77．4%となっている。

・活動するにあたって影響を受けた人あるいは出来事の有無では，「あり」が61．4%を占めている。これを性別で見ると，「あり」の比率は男性で62．5%，女性で55．3%となっている。

．お世話になったと思う人の有無では，「あり」が62．9%を占めている。これを性別で見ると，「あり」の比率は男性で62．5%，女性で63．2%となっている。

．そのお返しをしたいと思う気持ちがあるかどうかでは，「気持ちがある」が72．7%を占めている。これを性別で見ると，「気持ちがある」の比率は男性で75．0%，女性で70．8%となっている。

．ボランティア活動はそのお返しにあたるかどうかでは，「お返しにあたる」が47．1%を占めている。これを性別で見ると，「お返しにあたる」という比率は，男性で43．75%，女性で50．0%となっている。

．信仰の有無では，「ない」が67．1%を占めている。これを性別で見ると，「ない」の比率は，男性で81．25%，女性で55．3%となっている。

．これからも活動を続けて行きたいかどうかでは，「続けて行きたい」が94．3%を占めている。これを性別で見ると，「続けて行きたい」の比率は男性で90．6%，女性で97．4%となっている。

3．グループ調査の概要

・性別では男性39．2%，女性60．8%である。

・年齢階層別では55歳以下が24．2%で最も多く，以下60代前半の20．8%，50代後半の19．7%，60代後半の18．8%，70代前半の8．3%，70代後半の5．0%，80歳以上の3．2%となっている。男女別に見ると，50代までは女性が，60代以降は男性が相対的に比率が高い。

・仕事の種類では主婦が56．8%で最も多く，以下定年退職者の14．5%，会社員の8．5%などが続いている。男女別に見ると，男性では定年退職者の43．6%，会社員の24．2%，女性では，主婦の74．6%，パートの9．5%がそれぞれ高い比率を占めている。

・開始時期では，昭和50年代後半が34．8%で最も多く，平成元年以降が30．4%でこれに続いている。

・活動年数では，10年～20年未満が30．4%で最も多く，以下5年－10年未満の26．1%，1年～3年未満の21．7%，3年～5年未満の17．4%がこれに続いている。

・活動を始めた動機では，「人や加盟団体から勧められて」が21．7%で最も多く，以下「身近での必要性が生じたことから」が17．4%，「社会のために何か

役立ちたかったから」「地域の仲間づくりのため」「豊かな地域社会のため」「他の団体として集まった者同志，気心が知れて何かしようと思って」がそれぞれ13．0%，「ボランティア講座に参加して」が8．7%などとなっている。これらのうち「他の団体として集まったもの同志，気心が知れて」「何かしようということになって」「ボランティア講座に参加して」などを『自発的に』，「身近でその必要性が生じたことから」「社会のために何か役立ちたかったから」「地域での仲間づくりのため」「豊かな地域社会のために」などを『自発的にプラス社会関係』とすると，『自発的にプラス社会関係』が78．1%，『自発的に』『勧められて』がそれぞれ21．7%を占めている。

．活動の種類や内容では，「食事サービス」が34．8%で最も多く，以下「友愛訪問」の30．4%，「施設の清掃」の21．7%，「施設内での奉仕」「行事の手伝い」の17．4%，「入浴サービス」「移送介助サービス」「地区の清掃」「手作り玩具，道具の製作」の13．0%などとなっている。

．活動の場所では，「地域内各所」が39．1%で最も多く，以下「その他の公共施設」の30．4%，「社会福祉協議会」の21．7%，「社会福祉センター」の17．4%，「対象者の自宅」の13．0%などとなっている。

．活動の対象者では，老人が65．2%で最も多く，以下障害児．者の47．8%，児童の17．4%などとなっている。

．活動で心掛けていることでは，「無理をしない」が69．6%で最も多く，以下「皆仲良くやる」の30．4%，「仕事の分担を決める」「計画どおり行なう」の17．4%，「永く続ける」「事前の準備をきちんとする」「プライバシーを守る」の13．0%などとなっている。

・活動して楽しかったことでは，「仲間を得ることができた」が47．8%で最も多く，以下「対象者に喜んでもらえた」の34．8%，「仲間と協力できた」の26．1%，「福祉に対する理解が深まった」の17．4%，「人生の生きがいができた」「健康になった」の13．0%などとなっている。

・活動継続の秘訣では，「無理をしない」が39．1%で最も多く，以下「会員のメンバーシップがよい」の30．4%，「民主的な運営」の26．1%，「家族や地域の理解を得る」の13．0%，「リーダーの人間性の魅力」の8．7%などとなっている。

・活動で苦労したこと．困ったことでは，「特になし」が34．8%で最も多く，以下「メンバーが足りない」「若いメンバーが少ない」の17．4%，「社会的評価が得られない」「活動費．運営費が不足している」の13．0%などとなっている。

・定例会の有無では，「開催している」が82．6%を占めている。

．開催の割合では，「月1回」が30．4%で最も多く，以下「年1回」の17．4%などとなっている。

．開催場所では，「公民館等の公共施設」が47．8%で最も多く，以下「社会福祉協議会」の17．4%などとなっている。

・会報発行の有無では，「発行していない」が69．6%を占めている。

．研修会等の有無では，「研修会等を開催している」が78．3%を占めている。

・その主催については，「会独自の研修会」が48．0%で最も多く，以下「社協主催の研修会」の24．0%，「県・市主催の研修会」の20．0%などとなっている。

・ボランティア保険の加入の有無では，「加入している」が95．7%を占めている。

．その掛け金の負担については，「個人が全額負担」が39．1%で最も多く，以下「個人の負担なし」の21．8%，「個人が一部負担」の8．7%などとなっている。

・年会費については，「会費なし」が43．5%で最も多く，以下「年額千円以上二千円未満」の30．4%，「年額二千円以上」の21．7%などとなっている。

・予算の有無では，「予算あり」が60．9%を占めている。

・助成金・寄付金の有無では，「有り」が65．2%を占めている。

・新入会員の受け入れの意志については，「受け入れの意志有り」が87．0%を占めている。

・他団体との交流の有無では，「交流・連携している」が56．5%を占めている。

4．若干の考察

以上の調査結果をもとに，以下若干の考察を行なつた。

個人調査の場合，第1に，「活動を始めた動機」「活動の種類・内容」「活動で心掛けていること」「活動

して楽しかったこと」「生きがいを感じること」「考え方の変化」「ボランティア活動とは何か」などの内容がそれぞれ多様であること，第2に，兄弟の数が相対的に多いこと，第3に，家族の反応は総じて良好であること，第4に，研修や講座の受講経験者が多いこと，第5に，両親のどちらかあるいは両方が社会的活動を行なっていたものが38．5%を占めていること，第6に，最終学歴も相対的に高いこと，第7に，苦労した体験をもちながら，必ずしもそれを苦労とは認識していないこと，第8に，しかし一方でその苦労体験によって助け合うことの重要性を感じていること，第9に，活動にあたって影響を受けた人あるいは出来事をもつ人が多いこと，第10に，お世話になったと思う人がいる人が多いこと，そしてそのお返しをしたいと思っている人が多いこと，などが明らかになった。また活動を始めた動機は，「自己充実型」と「社会関係充実型」に二分されるように思われる。

いずれにせよ，シニアボランティア活動が，「社会関係を拡大．充実し」さらに「生き方の充実」につながっていることは確かなことのようである。

グループ調査の場合，第1に，50代までは女性が，60代以降は男性がそれぞれ比率が高いこと，言い換えると，女性は「主婦型」，男性は「定年退職型」のイメージが強いこと，第2に，「活動を始めた動機」「活動の種類や内容」「活動で心掛けていること」「活動して楽しかったこと」「活動の秘訣」などの内容が多様であること，第3に，定例会は，「月1回」「公民館等の公共施設」で開催するのが一般的であること，第4に，会報を発行していない比率が高いこと，第5に，ボランティア保険に加入していても，その掛け金は個人の全額負担が多いこと，などが明らかになった。

いずれにせよ，ここでもシニアボランティア活動は，多くの課題を抱えながら「生き方の充実」と「社会関係の拡大・充実」を推進しているように思われる。

≪参考文献≫

1）Biegel，Shore，Gordon，Building Support Networks For The Elderly：Theory and Applications Sage Publications 1984.